

## 闡光録

### 四、無碍道

大経においては法蔵菩薩の師仏を世自在王如来と言ひ、『無量寿如来会』には、世間自在王如来となつてゐる。世間に処して自利利他すること自在なる覚者という意であろう。世間自在王如来とは、一切菩薩の理想ではあるまいか。法蔵菩薩は、正覚を成就して、尽十方無碍光如来となられた。尽十方無碍光如来になりたうことが一切衆生の本願である。世間自在王と、尽十方無碍光との間には一如相通するものがある。

あちらで鼻をうち、こちらで鼻をうち、無碍どころか、障碍ばかりに満ちてゐるのが人生である。苦悩ばかり満ちてゐるのが人生である。そこに人間の努力があり、苦闘がある。

朝に苦しむ人の告白を聞き、夕べに悩む人の相談を受ける。それだけでも、人生は暗い苦しい処だと、私の頭にこびりついてしまふ。私の上にも、不断に苦悩がおしよせてくる。一難去れば一難来り、一波一浪はてしなき人生ではある。

「念仏者は無碍の一道なり。」

この親鸞聖人の生活経験の告白宣言が、近頃の私の胸中に迫つて去らない。この一句の念持がいつしかに私を法蔵の願心とくろへとつれてゆく。

もしも、人生が「難度海」でなくて、永遠になぎきつた春の海のようなものであり、子供の唱歌にあるような楽しいことばかりのものであるならば、「無碍道」の意味も尊さもないと思う。

二十代で、子供をつれて未亡人になつた女、白髪をいただいて、たつた一人息子に死なれてしまつた老婆、憂鬱な家庭苦の中に閉じこめられた人、等々、どうすればいいのか。最後にあつて、語り得る道は念仏道だけである。

親鸞聖人は御一生九十年、苦勞人であつた。火の中、水の中、氷の中、孤独、貧困、誤解、迫害等々に、全く荊棘の道を歩んだ方である。それだからこそ「念仏者は無碍の一道なり」の一句が私たちに強い迫力を持つて迫るのである。それだけに、われらは軽率にこの世界を自己の上に弄んではならない。

地上たつた一人の師に別れ、木の葉が散るようになびしくも荒らされた吉水を後に、北越をさして歩まねばならぬ祖聖の心境を憶う。

真実は、無惨にも権力と因習に蹂躪せられ、冷たい冷たい越路の荒野に立たれた時、ただ感ぜられるものは、久遠の業苦そのものだけではなかったであろうか。

また、事もあろうに、父の生命そのものであった念仏道を、わが長男に乱されたもうた聖人の苦衷、お察しするだに余りがある。

晩年には食うにさえご不自由でましました聖人、まことにご一生、苦難そのものであった。

真実が何だろうと、法がどうであろうと、そんなことは考えずに、ただ自分の感情だけに動かされて流されて生きる人には「無碍道」は開かない。苦しくてもそれを数えたててはいられず、人が無道であるからとて、自分にそれを許すことはできない。まして、自分の感情のままに動いてゆくことの許されない人の苦悩からのみ道は生まれる。

あとへも帰られず、立つてもいられず、先にもまた苦悩の暗が待っている。

泣いてみても、涙ではなんの解決にもなってくれない。怒ってみても、恨んでみても、考えてみても、それでは問題は無くはならない。学問の力も、いい加減な信心歓喜も、いつかの夢と消してしまふ。

そうした何の力も失われた時、荒野の涯に訪れたものはお念仏である。大地の底から動き出る法蔵の願力である。

そこにこそ「念仏者は無碍の一道なり」との体感は生まれたのである。法然上人の2  
み教えは苦悩の中に試練され、生活されたのである。

それはけつして安価な陶醉ではない。陶醉も詠嘆もつきはてた、絶対忍従の沈黙、その沈黙の底に動き出る力、一切の苦悩をそのままに、如来金剛の願力に乗托した者の体解する無碍の境地、そこにはただ、一本の道が見える。

「先生にお会いした時、先生のお顔をまともに見られるような生活、はたして今日の私がそうなっているでありましょうか。愚なりと言ひ、弱いと言ひ、みなみな先人の模倣でございます。ほんとうは、愚を愚と知らず、弱いを弱いとも知らない鉄面皮な私でございます。どうして先生にまともにお顔の合わせられる私でございます。どうすることもできないこの現実の苦悩の中に突つ立つて初めて、先生のみ教えに遇いたできた喜びを感じます。△△での第一の難コースは幸にとにかくも歩ませていただきました。これから第二第三、いいえ限りない難行路が待っております。先生、御師父様、私が私の道を忠実に歩みますよう、どうぞいつまでも御叱正御教導下さいませ……………」

私は涙なしには読まれなかった。貴女は第一の難コースを見事突破しました。泣こうに泣かれない苦しきでありました。先日、無事になつた××さんを見た時、私は何も言わずお念仏しました。合掌してお礼を言います。ああ。純正光明団々員！

怒りも、反抗も、呪詛も、欲も、権力も、我慢も、横暴も、悲観も楽観も、無碍道ではない。

涅槃に通ずる大信心のみ無碍道である。

「仏はどこに生きるのか、

仏はだれに生きるのか、

仏はいつ生きるのか。

今、ここで、汝の上に、仏生きたもうことに徹底せよ。

今日の生活をぬきにして、いずれのところに宗教があるう。」（聖光）

静かに「天言地声」を襟を正して聞かんとする時、汝の今日の生活は何事ぞと、叱咤の音が聞こえてきます。大法はまことに、限りなく永遠に輝きます。その光を、その徳を解消せんとするものこそ、我執であり、欲であります。

悪魔と戦うことまことに太子のごとくあれ、祖聖のごとくあれと、またしても先生のみ声が聞こえます。深き内観の世界において、智慧光輝かざれば、より深き貪愛瞋憎の深淵に沈みつつ、それをもつて人間の生きる天地と執着することあります。ご教化をいただく時、如来の願の総意に生きることこそ、われらの歩むべき一道だと領解せられます。

欲と願とのご教化は、幾度かお聞かせにあずかりました。しかし話はその場でああそうかと知ることができませんが、それを体験に実践化する時、またしても悪魔に戦いとられます。汝の生活の不徹底は、ただちに汝の自他の世界を退転せしめるとの、先生を通してのみ声が聞こえます。汝何すれど、精進努力せざるや。汝二道を歩むなかれ。汝、真実の一道に教主のごとく歩みきれ。汝の使命は、ただ真実を歩むこと、それのみが許されてある。……………以下略」

六銭はられた重いお手紙の一節、襟を正して拝読する。

欲の結晶体から、欲は逃げない。「罪悪も、業報を感じる能わず」とは、欲を無くしての願ではなくて、三毒を智慧光に照破されて、大悲の本願に乗托した時、自然法爾の大信にはらむ願である。欲を欲とも知らぬ欲の中には、無碍道はあり得ない。清浄願往生心の白道に生きてこそ、深くして底なき欲の淵は見える。見えるがゆえに越えるのである。願往生の一道でなくて、何で無碍の道味があり得よう。

憶え君よ。欲に生きるも一生である。願に生きるも一生である。われらは生を大地に享け、宿縁うれしくも大悲の願心聞く。

「夫れ真実の教行信証を案ずれば、如来大悲廻向之利益なり。故に若しは因、若しは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心之廻向成就したまへる所に非ざること有ること無し。」（証巻）

教行信証のすべては、如来大悲の廻向であり、施設であり、これをおいて、どこに、真実があり、生活があるう。

欲は「教家」の生命にあらず、いな人間の正しい生活の骨格も、肉も血も、教行信証をおいてほかのどこにあらう。

ゆえに、われらをして、徹頭徹尾、教行信証をわれらの生命たらしめよ。

これをおいてほかに、目標とし、道とし、生命とし、生活とすべきもの一もあることなし。

われらをして、如来の教法を売りて人間の栄達を求め、幸福を求め、放逸怠惰を求めんとする人々の亜流たらしめることなかれ。

たとい、そのために、百千倍の苦難おし寄すとも、無碍の一道はわれのものたるであらう。

無碍の一道とは、人間得意の日を言った言葉ではなかつた。逆境のどん底にも、感じ得る道であつた。欲の満たされた快樂ではなくて、満たされない現実に立つて、大いなるものの心に満たされたよろこびであつた。

外から支えられて苦悩を分つのでなくて、内部生命の燃焼に立ち上るのであつた。

疲れた体、重い頭、だれもない室にたった一人考えこんでいたい日、眼を閉じて、自己自身に沈潜しきる時、貪愛瞋憎の雲霧の下、静かに寂かに、無碍の道味を念仏の中に感銘しつつ、思いを遠く同胞の上に運ぶ。